

暴力革命は肯定されるか？ ——南京占領時期の太平天国の宗教に対する ヨーロッパ人の認識——

菊池 秀明

前 言

南京建都後の太平天国に関する史料は、すでに先人の努力によって多くが発掘され、史料集などに収録されてきた。その多くは江南の知識人たちが記したもので、太平軍を「賊」と見なす視点から描かれている。また太平天国を訪問した宣教師の記録など欧文史料も紹介されているが、それらは主として太平天国が上海付近へ進出した 1860 年以降のものであった。当時は太平天国が衰退期にあったため軍の地方軍事勢力化が進み、将兵の規律が低下するなど天京事変以前の太平天国の姿とは異なる部分が多い。

そこで本稿は 1850 年代にヨーロッパ人が太平天国を紹介、評価した著作の中から、日本東洋文庫のモリソン文庫に所蔵され、これまで注目されてこなかった史料をいくつか紹介したい。それらは太平天国の宗教、太平天国統治下の人々の生活について新たな記載を含んでおり、とくに画像史料は注目に値する。また本稿はこれらの史料について初歩的な分析を行うことで、従来主としてリンドレー (A. F. Lindley) の著作¹⁾ や簡又文の研究²⁾、クラークとグレゴリー (P. Clarke and J. S. Gregory) の史料集³⁾ を通じて紹介されてきたヨーロッパ人の太平天国認識について再検討してみたい。そしてこれまで見落とされていた当時の論点が、現在の太平天国史研究にとっていかなる意味を持ちうるか考えてみたいと思う。

一、『中国の革命・それを導いた原因について』

まず取り上げるのは佚名『中国の革命・それを導いた原因について (The Chinese Revolution: The Causes which led to it)』である⁴⁾。表紙の絵図には十字架をあしらった武器が描かれており、当時のヨーロッパ人が太平天国に中国をキリスト教化する運動という期待をこめたことが窺われる。またこの書で強く印象づけられるのは「南京占領後の祝い (Rejoicing at Nanking after the Siege)」という 2 幅の絵であろう。この本の著者は不明で、序文を見る限り南京を訪問した事実はないが、第 5 章の「南京行き (The advance to Nanking)」でイギリス公使ボナム (S. G. Bonham) の南京訪問について詳細に記している。競渡と見られる船のレースや市場の賑わいなど、彼らの報告を元に活気に満ちた南京市内の様子を描いたと推測される。

この本で注目されるのはボナムの使節に同行し、メドウズ (T. T. Meadows) と共に北王韋昌輝と会見したスプラット (Lieutenant Sprat) の手紙に言及している点である。ここでスプ

ラットは太平軍が強さと使命感に満ち、清軍の無能さと民衆の支持に助けられながら、既存の秩序とくに偶像崇拝の打破に熱心に取り組んでいると述べている。また彼は次のように述べている。

They believe they have a mission from heaven to kill all the Mantchoos, and they certainly put this in execution as far as they can; and, without attempting to justify this practice, I believe that nothing short of driving the Tartars out of the country can make civilization progressive in China..... / Confidence was said to be on the increase among the old population, and they were gradually returning to their homes, and I fully believe this to be the case, as we saw many carrying furniture and clothes, etc., into the city. We observed, also, that the houses of the better classes of Chinese were sealed up by the insurgent chiefs, I fancy to prevent their being plundered; not so those of the Mantchoos, which they evidently consider fair game—the disgorgement of unjust gain and plunder from them for other Chinese. Their clear principle is, China for Chinese.⁵⁾

これによると太平軍は満洲人を一掃することが神から与えられた使命だと考えており、それを正当化する理論を欠いているものの、スプラット自身も中国の「文明的進歩 (civilization progressive)」のためには清朝を駆逐すべきとの見解を持っていた。また南京の人口は回復しつつあり、人々が家財や衣服を城内へ運び込んでいるのが目撃されたこと、有力者の邸宅は太平天国の首領によって封鎖されているが、それが満洲人の財産没収であるならば、彼らの「中国人の中国」という明確な原則に照らして非難出来ないと述べている。

次にスプラットは太平天国の人々が厳格なモラルを持ち、男女の隔離に努めていること、彼らの法廷は訴訟人に対してオープンで、清朝政府の衙門のように拷問に頼らないことを指摘している。また人々は軍を「聖軍 (Holy Army)」、南京を「聖都」と呼び、互いに「兄弟」と呼び合っていた⁶⁾。さらに太平天国の南京占領時に発生した旗人虐殺事件について、スプラットは次のような評価を与えている。

It is horrible to think that they cut off 20,000 Mantchoos, even to the infant at breast, but they seem hostile only to them; but it is still more horrible to think that the Mantchoos, in two of the many provinces, cut off as many in the name of justice within the year (we know of 2,000 in six weeks); and this in the name of justice! The former is the exception, the latter is the rule. It may prove the least sanguinary practice in the end. Like Cromwell's severity at Drogheda, it has struck terror into their opponents; the Mantchoos are chapfallen and almost afraid to approach them; they say that six of them would beat any twenty imperialists; They talk of their strength, when we know a multitude of them are but

boys, and or their red eyes, etc. / If they succeed, —and I fancy they will, and soon—they will deliver three hundred millions from the grossest of immoralities, the most grovelling of idolatries, and the most grinding of tyrannies. China will be opened to light, life and civilization, all which will be thrown with all their influences and importance into the Anglo-Saxon scale.⁷⁾

ここでスプラットは太平軍が幼児を含む2万人の旗人を殺害したのは確かに恐ろしいが、彼らが敵意を向けた相手は限定されている。これに対して清朝がこの1年に正義の名の下に行った虐殺行為の方が、例外的な行動ではなく、統治の一環として行ったものである分だけ遙かに恐ろしいと述べている。これは同じく南京を訪問したフィッシュボーン (E. G. Fishbourne) が事件発生の事実を信じなかったのに比べると、冷静な受け止め方と言える⁸⁾。またスプラットによると、南京の事件は満洲人を意気消沈させ、彼らは太平軍に立ち向かおうとしなくなった。逆に太平天国の人々は少年であっても清軍将兵を恐れぬ。これらの事実を踏まえてスプラットは、太平天国が成功すれば、中国では3億人が非道徳や偶像崇拜、専制支配から解放され、ヨーロッパ人の目から見ても文明的になると期待感を表明している。

南京滞在を終えたボナム一行は鎮江へ向かい、羅大綱らと会見して今後イギリスと太平天国が共闘あるいは交戦する可能性について語った。その内容はフィッシュボーン of 著書 *Impression of China* に記されたものと同一である。当時の英文史料は互いに他の著作を引用し合っているが、出版年代を見る限り本書の方がオリジナルに近いと考えられる⁹⁾。また本書第5章と第9章、反乱軍の教義 (The Doctrines of the Insurgents) はノース・チャイナ・ヘラルドに掲載された太平天国文書やそれに対するメダースト (Medhurst) の論評、宣教師たちの手紙などを紹介している。そこで本書は『頒行詔書』に収められた楊秀清らの檄文が、偶像崇拜を行う満洲人を駆逐して真の神を崇拜すべきことを主張していると紹介したうえで、太平天国の宗教について次のように述べている。

From the foregoing curious documents, we are justified in inferring that there is evidently a tinge of fanaticism and of imposture in the religious cry raised by the insurgents, for, while they profess to venerate the religion of Jesus Christ, they do not scruple to style their own leader the younger brother of our load, who, they say, came down from heaven for the instruction of mankind in the Ting-yew year (1837), so that, although the foundation of their faith may be Christian, there is nothing to show that the superstructure is not as extravagant a superstition as Mormonism itself; and, as in the course of this narrative we have too frequently seen, they proselytize by massacre as much as by faith. Their belief in a special mission to destroy the Mantchoos—man, woman, and child, so that there may not

be left a sprout for the race to reproduce itself—must certainly prove a bar to our perfect sympathy with them; and we are not surprised at the assiduity with which the English are recommending to their notice the New Testament in preference to the Old.¹⁰⁾

これによると、太平天国の宗教的な叫びには熱狂と欺瞞の痛みが存在する。その基礎はキリスト教であり、モルモン教（19世紀のアメリカで生まれたキリスト教の一派）のような迷信性は認められないが、彼らは信仰と虐殺によって改宗を迫っている。満洲人の一掃を使命とする彼らの信仰は我々が彼らに同情を寄せる上での障害となっており、イギリス人が彼らに旧約よりも新約を勧めているのは驚くにあたらないとしている。本書は別の箇所でも太平天国の教義に見られる攻撃性の強さをイスラム教やモルモン教と比較しており、その旗人に対する復讐の情熱や後述する一夫多妻制（指導者たちの好色ぶり）、そして統治権への渴望に対して疑念を抱いていたことがわかる¹¹⁾。

なお本書は第10章の革命の政治的、商業的側面について (*The Political and Commercial Aspects of the Revolutions*) で、太平天国の成長に伴って持ち運びに便利な金の需要が高まっていること、アヘン交易の合法化をめぐる中国の動向はインドとイギリス（東インド会社）に大きな影響を与えると予想され、革命の進展にかかわらず茶と内陸の商品は流通量が減っていると指摘している。また第11章の広東と北京の現状と未来 (*The Present Position and Future Prospects of Canton and Peking*) は、厳戒態勢下の広東で秘密結社の影響を受けた都市住民が反清の動きを見せており、有力者が財産を携えて避難していること、広州の占領は容易であり、北京が陥落すれば広東の人々は太平天国への支持を表明するだろうと予想している。

さらに興味深いのは北京に関する記述で、龐大な軍事費支出を支えられずに多くの銭庄が閉店し、穀物の価格が高騰して貧民は打撃を受けている。北京の食糧は大運河の輸送に依存しており、最近では海運もなされているが、南京陥落後は大運河が機能を停止してしまい、慌てて台湾米の輸送を計画したが実効は疑わしいと述べている。また財政が逼迫した清朝は敗北した欽差大臣賽尚阿、徐広縉の財産を没収し、将校の処刑を命じているが、それは自殺行為に他ならない。南京で太平軍に殺害された陸建瀛も家族が酷い仕打ちを受けており、穆彰阿、耆英など裕福な貴族が献金を行っているのも世間の反感を生むだろうと指摘している¹²⁾。当時のヨーロッパ人が多方面にわたり情報を収集し、太平天国の成否とその経済的影響を見極めようとしていたことが窺われる。

二、『中国の革命・中国と中国人の習性、マナーおよび慣習の詳細と共に』

次に取り上げるのは『中国の革命・中国と中国人の習性、マナーおよび慣習の詳細と共に (*The Chinese Revolution, With Details of the Habits, Manners, and Customs of China and the Chinese*)』である¹³⁾。著者はマクファーレン (*Charles Macfarlane*) で、『日本』『ウエリント

ンの生涯』の作者として知られる。この本は清朝の成立から太平天国の南京占領まで3章に分けて記述した本文と、付録として収録された太平天国関連の史料10点から成る。先ず目を引くのは付録3の宗教信仰 (Religious Belief) に関する史料で、上帝教について「良い点」と「誤り」を7つ挙げて論評している。

「良い点」の第一は唯一の真の神に対する信仰 (Belief in the One True God) であり、彼らの教えが旧約聖書と中国の古典に基づいていることを指摘している。太平天国の主張によれば、太古の中国人は真の神を拝んでいたが、キリストが誕生する前に秦の始皇帝が偶像崇拜を始めて神への信仰を放棄してしまった。これはヨーロッパの思想、文化の源流が中国文明の中に見られると主張する「西学中国起源論」の一例であると考えられるが、評者はこれを荒唐無稽と批判せず、「唯一の神に対する彼らの信仰の誠実さ」を評価する態度を取っている。第二は十戒の受容 (Adoption of the Decalogue) で、太平天国が偶像崇拜を厳しく禁じた点について、非キリスト教圏の多くの人々が第五の戒律である“なんじの父と母を敬え”以下の教えには賛同するものの、前半部分に関心を示さないことと比較して賛辞を送っている。また太平天国が性に関するタブーについて厳格で、第七の戒律である「姦淫するなかれ」の教えに違反した者をアヘン吸引者と共に死刑に処していることを特筆している。第三は神の国の承認 (Recognition of the Future State) であり、彼らが天堂と地獄という概念を持っていることを評価している。

次に「誤り」について、評者は第一にキリスト教の真理に対する理解の欠如 (Defective Notions of Christian Truth)、第二に三位一体説の否定 (Denial of the Trinity) を挙げている。後に洪秀全は三位一体説をめぐる宣教師と論争を繰り返した。だが評者は当時ヨーロッパ人の入手した太平天国文献が少なかったため、太平天国が新約聖書の教えを無視していることを認めながらも、あからさまな批判は控える慎重な態度を取っている。また第三、第四の錯誤として取り上げられたのは太平天国指導者の一夫多妻制 (Polygamy) であった。評者は次のように述べている。

I can not condemn them on account of these things so immediately and strongly as many do. Their obtaining among them, illustrates and confirms the view that they have not got the New Testament Scriptures, nor learned much from European or American missionaries. It is, believing this, that I cannot think very unfavourably or unhopefully of them, because of their offerings and their many wives. Should it turn out that they do those things, having the whole revealed will of God before them, and having had it enforced upon them in those very points by instructors, my opinion of them in those will be greatly modified. But at present, while from other grounds I infer their ignorance of our Christian records, there does not appear to me anything very culpable in the practices we are considering.¹⁴⁾

これによると太平天国の指導者たちが多くの妻を抱えているのは、彼らが新約聖書や欧米の宣教師から学んでいない結果であった。ただし評者は彼らの多妻制を非難あるいは失望の目で見ざるべきではなく、これも神の意志なのであるから、現時点で彼らがヨーロッパのキリスト教的価値観を無視しているのはそれほど不埒とは言えないと同情的な見方をしている。そして彼らはモラルを向上させて多妻制を放棄すべきであり、そのためには『創世記』第二章のアダムとエバの物語についてきちんと教える必要があると述べている¹⁵⁾。

この太平天国指導者の多妻制は後々宣教師たちが太平天国の異端性を批判する重要な論拠となり、とくに香港滞在経験をもつ干王洪仁玕が多くの妻を持ったことは激しく非難された。スプラットの手紙もこの問題に言及し、太平王は36人の妻を持っているが、一般には認められていない。それは彼らの情報不足に加えて、彼らが新約よりも旧約の知識を多く持っていたことが影響していると述べている¹⁶⁾。最初の接触からヨーロッパ人にとって太平天国の多妻制が関心の的であったことを示している。

さてマクファーレンの著作は、本文でも宣教師の太平天国認識について貴重な史料を載せている。その一つは香港のビクトリア主教 (bishop of the Victoria) だったスミス (J. Smith) の手紙で、太平天国の宗教についてモルモン派、ピューリタンなど様々な評価がなされているが、本当の姿は不明である。ボナム一行の情報を見る限り、太平天国の宗教は迷信や中国特有の観念との混交物であるが、同時にギュツラフ (K. Gutzlaff) の翻訳した聖書が反乱軍のキャンプに流布している。彼らは非妥協的な偶像破壊主義者 (iconoclasts) で、カトリックとは交渉がないようだ。また彼らは外国人を「洋兄弟」と呼ぶなど友好的で、アヘン以外の交易に意欲を持っている。南京は一時的な首都に過ぎず、近く北京攻撃が発動されるだろうと予想している。

スミスはこれらの情報に基づき、太平天国の指導者には宗教的な誠実さと市民的な愛国心が見出せると積極的に評価している。また現在中国は巨大な変化に直面しており、イギリス国教会は中国のキリスト教化を促すために、本国から優秀な人材を派遣して伝道に努めるべきである。イギリスが植民地を持つ帝国としてこれらの使命を果たさず、自らの栄達と富を求めるならば、その栄光の座から滑り落ちてしまうだろうと警告している¹⁷⁾。

スミスの太平天国評価についてはリンドレー『太平天国』も短く言及しているが、そこで引用された文章はこれと異なるようである¹⁸⁾。また本書は当時広東にいたある宣教師が China mail の編集者に宛てた「反乱軍の宗教的特徴について (The Religious Character of Insurgents)」なる文章を載せている。

この文章は洪秀全が『勸世良言』と出会い、ロバーツ (I. J. Roberts) のもとで学んだ経緯について比較的詳しく述べている。また 1852 年に香港へ脱出した洪仁玕の証言について触れている。そこで紹介されている内容はロバーツの「洪秀全の革命の真相」¹⁹⁾と似ているが、作者はロバーツではない。また文章は洪仁玕とハンバーグ (T. Hamberg) との出会いについて伝聞として記しており、ハンバーグの作品でもない。アメリカ長老会宣教師ハッパー

(Andrew P. Happer) が書いた可能性が高いが、あるいは香港時代の洪仁玕の教師となり、彼の南京行きに反対した英華書院院長のレッグ (James, Legge) かも知れない²⁰⁾。

この文章の特徴は上帝会の経験した迫害や苦難を踏まえながらも、彼らの武装蜂起について否定的な見解を述べた点である。太平天国の主義や行動に満足できるものはなく、彼らが「神の奇跡的な手助け」のもとで行っているのは憎悪と熱狂に彩られた殺人行為に他ならない。彼らは旧約聖書の影響で偶像破壊を行い、仏教の僧侶を殺したが、そのやり方はキリストというよりも地獄随一の悪魔であるベリアル (Berial)²¹⁾に近い。さらに文章は太平天国の引き起こした虐殺事件について次のように告発している。

What has marked the whole course of this desolating scourge but plunder and exaction, bloodshed and murder—in many cases the most wanton and brutal murder of the peaceful and unresisting people, as well as of the officers and Tartars. The ears of the Canton people yet tingle at the mention of the wholesale and indiscriminate massacre of men, women, and children, at Tsiuen-chau city, in the north east corner of Kwang-si province. The number massacred at the capture of the three cities of Wu-chang, Han-yang, and Han-kau, will never be accurately known. Some letters state, that they themselves spoke, with the greatest coldness of feeling, of having massacred twenty-five thousand persons at the capture of Nankin.²²⁾

別稿で述べたように、ここで挙げられた 1852 年 6 月の広西全州における住民虐殺は事実ではなく、太平軍の非妥協的な戦いぶりに驚いた人々が作り出したフィクションであった²³⁾。だが史料からはそのニュースが衝撃をもって広東へ伝えられたこと、武漢三鎮の死者数は不明だが、南京の旗人犠牲者が 25,000 人に達するとの情報が届いていたことがわかる。そして聖書は偶像崇拝を禁止したが、暴力によって偶像や寺院を破壊せよとは命じていないし、僧侶や旗人を殺せとも言っていない。上海の宣教師は彼らにキリストが武器を手にして迫害に抵抗することを許していないと教えるべきだと主張している²⁴⁾。

マクファーレンはこれら二人の宣教師の議論はどちらも極端だが、「反乱軍の宗教的特徴について」も太平天国が超越した存在に対する信仰を持っていることは認めていると指摘した。また儒教には信仰的な感情がなく、その冷えた哲学に飽き足らなかった人々が帰依した仏教も偶像崇拝でしかなかった。中国には新しい宗教が必要であり、太平天国は苛酷な帝国支配に苦しんだ人々が生みだした運動であると評価している。さらに彼は暴力的手段に訴えることの是非について次のような見解を表明している。

As to the deduction of “conservative,” that these people cannot be Christians of any kind, because they wage war and shed blood, it is to be observed that Christianity never yet,

immediately and on its first introduction, changed the whole character of a people. The English, the French, the Germans, the Spanish, the Italians, all engaged in wars after their conversion, and continued to carry on wars with ferocity and cruelty many ages after Christianity had been preached to them, and their countries covered with Christian churches. One of the very first results of the Reformation was a long and bloody war, in which it can scarcely be said that the Protestants were much more gentle or merciful than the Romanist. The true Christian spirit was developed in Europe by very slow degrees; and how far we are, even at this day, from possessing it in fullness and purity, the last Annual Register, or the last newspapers, the records of a single week, or a glance at the actual condition of Europe (where the flames of war may be rekindled tomorrow), will give us sufficient proof and conviction.

We confess that we cling to the belief or hope that, however imperfectly, some seeds of the pure faith have been sown in China, and that great and happy results may be anticipated therefrom. At least this is clear, —the Chinese have had awakening. Better almost anything than the dead sleep in which they have been lying for so many ages. Their condition, their vices, their government, their irreligion, were all so bad, that almost any change must be for the better. The empire was as a gangrened, putrefying corpse. There is at least life in this insurrectional movement.²⁵⁾

これによるとヨーロッパではキリスト教への改宗後も戦争と暴力がくり返されており、宗教改革の生んだ結果も長く血なまぐさい戦争であった。そこではプロテスタントがカトリックに比べてとくに紳士的で情け深かった訳でもなく、本当のキリスト教的精神はヨーロッパにおいても非常にゆっくりとしたペースでしか発展して来なかった。そして現在確実に言えることは、たとえ不完全であろうとも中国に信仰の種が播かれたということであり、中国は目覚めつつあるのだと結んでいる。

このように太平天国の宗教に不寛容な攻撃性を見いだしながらも、それを異端と見なすことなく、ヨーロッパのキリスト教社会に対する内在的な反省を伴いながら積極的な評価をする論調は、従来の研究において見落とされてきた部分であった。リンドレーはイギリスの中国政策を批判するために、簡又文は彼の提唱した「太平基督教」の正統性を証明するために、それぞれ上帝教の性質を単純化してしまったように思われる²⁶⁾。その後ヨーロッパ人の間では太平天国を異端視する傾向が強まった。だが1860年7月のNorth China Heraldは、ヨーロッパにおけるキリスト教の歴史も血なまぐさいものであり、太平軍がかつてのヨーロッパの正統派キリスト教徒と同じように過激な偶像破壊を行っているからと言って、これを「異端」として批判するのは間違っているという論説を載せている²⁷⁾。旗人虐殺に見られた太平天国の排他性は、福音主義の情熱と共に近代ヨーロッパが全世界に伝えたユダヤ・キリ

スト教思想の産物であり、これに直面したヨーロッパ人に反省をうながすものであったと言えよう。

三、『太平王の生涯・中国における叛乱の首領』等

続いて紹介するのはマッキー (J. Milton Mackie) の『太平王の生涯・中国における叛乱の首領 (Life of Tai-ping-wang, Chief of the Chinese Insurrection.)』である²⁸⁾。この本の出版年は1857年とやや遅く、すでに雑誌や著書で紹介されていた太平天国情報をもとに、47章に分けて幼年時代から南京占領へ至る洪秀全の生涯を描いた。太平天国の宗教思想を記した第43章、反乱軍の信条 (The Insurgent Creed) は「神以外の神なし。太平王はイエス・キリストの弟なり (There is no God but God; and Tai-ping-Wang is the younger brother of Jesus.)」という表現で上帝教の主張を要約的に示している。また興味深いのは数枚の挿絵で、1837年に洪秀全が見た幻想や、蜂起した上帝会軍と清軍の戦闘、南京報恩寺付近の攻防などを描いている。白衣に身を包んだ上帝や十字軍を思わせる太平軍の姿にヨーロッパ人の抱いた太平天国のイメージがよく示されている。

ちなみに本書も宣教師の手紙をいくつか収録している。例えば1852年に江西の人々が太平軍の到来を心待ちにしていると記した天主教主教デラプレース (Dr. L. G. Delaplace) の手紙や、1853年に洪秀全からの手紙を受け取ったロバーツが美国駐華委員マーシャル (H. Marshall) に太平天国占領地域で伝道することの可否を尋ねた手紙などが収録されている²⁹⁾。また従来注目されてこなかった史料として、1853年8月にカトリックの湖広地区主教だったリゾラッティ (Mgr. Rizzolati) がリヨンとパリの中央評議会宛てに送った次のような手紙がある。

They (the insurgent kings) have placed all the resources in a common treasury, and reorganized society on a new plan, that is, in groups of a certain number of persons of both sexes, who are prohibited from cohabiting together, under the most severe penalties. This rule is to be observed until the whole China shall have been conquered. All honorary titles are abolished, except those of officers in the army. The men are to adopt the appellation of *brothers*, and the women that of *sisters*. Each family has two chiefs; a man for government of the male members, and a woman for the females; and over all these individual dignitaries a hierarchy is established, comprising general presidents of both sexes. All these confraternities live in common, at the expense of the public treasury; and all of them are bound to perform military service, the men under the command of a male leader, and the women under that of the female; for there are captains of both sexes. After the conquest of the empire, the families, whose military services may no longer be deemed necessary, are to return to their cities, where there is to be no distinction of rich and poor, but perfect

equality. However, according to the laws of their communism, the king, the princes, and generals are to have the exclusive right of possession and acquisition, and the subalterns are to remain in the service of their chiefs, and to receive, in reward for these services, such food and clothing as the generosity of their masters may induce them to bestow.³⁰⁾

ここでは太平天国が永安州や武昌、南京で実施した聖庫制度などの社会制度が紹介されている。清朝が打倒されるまで家族は解体され、男女別営に組織されるが、貧富の格差も否定され、「完全な平均」が行われると述べている。また王や將軍たちは彼らの共産主義的な法律に従って特権的な所有権が認められ、彼らの王府に仕える人々はそこで衣服と食糧を支給されると語っている。1861年に南京を訪問したイギリス将校のウォールスレイ (G. J. Wolseley) も「人々は主人の旗のもとで服役し、主人から毎日の食品、衣服やあらゆる日常用品を受け取っている」³¹⁾と述べており、王たちの能力がそれぞれの王府に所属する人々をどの程度養えるかによって測られる傾向が早くから存在したことを窺わせる。

この他に東洋文庫には『中国のキリスト教・その伝道の歴史と現在の反乱 (The Christianity in China, The History of Christian Missions, and of the Present Insurrection)』³²⁾が所蔵されており、その扉には咸豊帝と洪秀全の画像が収められている。その第12章、現在の中国における叛乱の起源とキリスト教の発展 (Originated History of the Present Insurrection in China, and its Successful Progress of Christianity) はかなりの分量を割いて太平天国発生の経緯を説明している。また『中国における伝道、全中国で活動している各教派の歴史 (China Mission, Embracing a History of the various Missions of all Denominations among the Chinese)』³³⁾は太平天国に関する記事は少ないが、太平天国と関わった多くの宣教師たちの伝記が収められている。ただしロバーツの伝記は見当たらず、彼が当時のミッシヨナリーにおいて全く評価されていなかったことがわかる。

結 論

本稿は南京建都時期の太平天国関連史料のうち、日本の東洋文庫に所蔵された英文史料を手がかりにヨーロッパ人の上帝教認識について検討した。彼らの多くは太平天国が南京に建都したとの知らせを聞き、中国がキリスト教化するチャンスと期待した。彼らはまた太平天国の旧約重視の傾向や旗人に対する容赦ない虐殺、ヨーロッパの習慣とかけ離れた多妻制などに少なからず疑念を抱いた。

実際には太平天国が十戒の教えに基づいて偶像崇拜を厳しく批判したのは、当時中国で活動した宣教師に影響を受けた結果であった。また入植先で差別を受けた客家出身の洪秀全は、祖国を失って四散したユダヤ人に救済を約束する『旧約聖書』の内容に強く惹かれていた。太平天国の旗人——偶像崇拜者に対する虐殺行為は、抑圧された民の救済論が生み出す「報復の暴力」に突き動かされており、これを知った宣教師の中には暴力革命に反対を表明

する者がいた。また太平天国に同情的な論者の中には、ヨーロッパにおけるキリスト教の歴史も戦争と暴力を伴っており、弱者の異議申し立てとしての性格が強い太平天国の攻撃性をもって、彼らを「異端」と決めつけることは出来ないと論じた。

近年海外で話題となったクリストファー・ロイド (Christopher Lloyd) の *What on Earth Happened?; The Complete Story of the Planet, Life and People from the Big Bang to the Present Day*³⁴⁾ は、中国文明が史上類を見ない強靱な文明として持続してきたことに高い評価を与えた。だが一方で彼は太平天国を「人類史上最悪の軍事紛争」と呼び、その犠牲者は 2,000 万人を超えると記している。こうした多大な犠牲を生んだ原因の一つが、太平天国が受容したユダヤ・キリスト教の千年王国論的な救済思想にあることは明らかである。かつての革命史観のようにこうした現実を過度に美化したり、あるいはカルト宗教のレッテルを貼って免罪符を与え続けることは最早出来ないだろう。

ひるがえって中国国内の情況に目を向ければ、数年来毛沢東が暴力革命を唱えたことの是非が熱く議論されている³⁵⁾。数千年の持続力を持った専制国家と官僚支配を打ち壊すためには、大衆動員を含めた爆発的なエネルギーが必要だったのか？それとも下層民の有産階級に対する闘争は秩序の転覆と報復の暴力を生むだけで、抑圧的な社会構造そのものを変えることは出来ないのか？毛沢東がベースとしたマルクス主義そのものが、ユダヤ・キリスト教の伝統を引く一つの千年王国論的思想であったことを考えると、抑圧された者による抵抗の暴力に関するヨーロッパ人の太平天国論は、現代中国の毛沢東評価をめぐる論争と重なってくるように思われる。南京の建都から 160 年、太平天国史研究は中国近現代史全体の認識に関わる問題としてその有効性を失っていないのである。

註

- 1) A. F. Lindley, *Ti-Ping Tien-Kwoh, The History of the Ti-ping Revolution, including a Narrative of the Author's Personal Adventures* (London, 1866). 増井経夫、今村与志雄訳『太平天国——李秀成の幕下にありて』平凡社東洋文庫、1964 年。
- 2) 簡又文『太平天国典制通考』香港猛進書屋、1958 年。
- 3) P. Clarke and J. S. Gregory, *Report on Taiping, A selection of documents*, Canberra: Australian National University Press, 1982.
- 4) London: Henry Vizetelly, George square, Fleet Street. 1853. 東洋文庫Ⅲ-7-D-14. この書は姜秉正編『研究太平天国史著述綜目』書目文獻出版社、1983 年、北京、419 頁に挙げられているが、これまで余り活用されてこなかった。筆者は 1987 年に王慶成氏 (元中国社会科学院近代史研究所所長) が東洋文庫を訪問された時、この史料の重要性をご教示頂いた。記して感謝したい。
- 5) *Ibid.*, 127.
- 6) *The Chinese Revolution*, 125. また E. G. Fishbourne, *Impression of China, and the present Revolution: Its progress and Prospects* (London, 1855), 180 にも同様の記載がある。
- 7) *Ibid.*, 128.
- 8) Fishbourne, *Impression of China*, 177.

- 9) Anonymous, *The Chinese Revolution*, 131. また Fishbourne, *Impression of China*, 184. この時冷静沈着な太平軍将校はイギリスが我々を援助してくれるならうれしいが、我々はあなたたちの援助なしでも目的を達成できると答えた。太平軍が上海を攻撃すれば報復すると警告したところ、我々は同じ神を崇拜する兄弟であるのに、どうして君たちを攻撃しなければならないのだと語ったと述べている。なおフィッシュボーンはこれを南京でのエピソードとしているが、本書に従えば羅大綱の発言ということになる。
- 10) Anonymous, op. cit., 166.
- 11) Ibid., 167.
- 12) Ibid., 169–176.
- 13) London: George Routledge And Co.Farring Don Street. 1853. 東洋文庫Ⅲ-7-D-13.
- 14) Ibid., 216.
- 15) Charles Macfarlane, *The Chinese Revolution*, 217.
- 16) Anonymous, *The Chinese Revolution*, 130.
- 17) Charles Macfarlane, *The Chinese Revolution*, 117–126.
- 18) A. F. Lindley, Ti-Ping Tien-Kwoh, *The History of the Ti-ping Revolution, including a Narrative of the Author's Personal Adventures*, 53, 148. (増井経夫、今村与志雄訳『太平天国——李秀成の幕下にありて』1、71頁および195頁)。
- 19) 中国近代史資料叢刊『太平天国』神州国光社、1952年、6、819頁。また P. Clarke and J. S. Gregory, *Report on Taiping*, 19.
- 20) The letter by the American presbyterian Missionary Erv.A Happer は、全州の戦いの後、太平天国が「韃靼人の徹底的かつ完璧な絶滅を叫ぶ」ようになり、占領地で「男女子供の区別なく捕まえ次第、徹底的な殺戮」を行ったと述べている (P. Clarke and J. S. Gregory, *Report on Taiping*, 75)。
- 21) 彼列はイサヤ (Isaiah) を殺し、ソドムとゴモラ (Sodom and Gomorra) を作った。天使の姿で人間を信用させ、人々を悪の道へコントロールするという。
- 22) Ibid., 132.
- 23) 菊池秀明『金田から南京へ・太平天国初期史研究』汲古書院、2013年、228頁。また崔之清氏もこの事件が封建文人の作り出したフィクションである事実を指摘している (崔之清主編『太平天国戦争全史』1、南京大学出版社、2002年、461頁)。
- 24) Charles Macfarlane, *The Chinese Revolution*, 132–133.
- 25) Ibid., 137.
- 26) 簡又文『太平天国典制通考』下、第20篇、宗教考 (下)、太平基督教の本性～太平基督教の革命性2020～2054頁。
- 27) North China Herald, No522, 28 July, 1860. また菊池秀明「太平天国における不寛容・もう一つの近代ヨーロッパ受容」(川島真等編『岩波講座アジア近現代史』1、岩波書店、2010年、300頁)。
- 28) New York: Dix, Edwards & Co.,321 Brodway. 1857. 東洋文庫Ⅲ-7-D-15.
- 29) *Life of Tai-ping-wang*, Appendix, NoteE および NoteG, 284, 288.
- 30) NoteC, 280.
- 31) G.J. Wolseley, *Narrative of the War with China in 1860* (London, 1862), 336.
- 32) Willian, S. Orr and Co. Amen Corner, London 1853, 東洋文庫Ⅲ-10-E-a-20.
- 33) William Dean, D.D., New York. Shelson & Co.115 Nassau Street. Boston: Gould & Rincoln. London: rubner & Co. 1859. 東洋文庫Ⅲ-10-E-a-28.

- 34) Bloomsbury Publishing PLC, 2012. 日本語版タイトルは『137億年の歴史』。著者 Christopher Lloyd はケンブリッジ大学卒業のジャーナリストで、太平天国に関する評価は日本語版の452頁。
- 35) ドキュメンタリー WAVE『毛沢東の遺産：激論・二極化する中国』日本放送協会 (NHK)、2013年。また『朝日新聞』は経済学者の茅于軾氏が発表した『把毛澤東還原成人』をめぐる論争や訴訟について報じている (2011年6月16日および2013年9月30日)。